

## 地頭・副地頭等の役割

### 1 地頭

地頭は、交響楽団で言えば、指揮者兼コンサート・マスターのような役割で、お役の方も含め参加者全員に対して、リーダーシップをとらなくてはなりません。

座る位置ですが、声は前方に向かって伝わっていきますので、地頭は常に最後列の中央に座を占めます。最後列の地謡が2人とか4人の偶数人数のときは正面に向かって、中心線の左側（見所から見た場合は中心線の右側）が地頭の位置です。

その心得乃至役割をいくつか思いつくままに掲げてみます。

#### ① 地謡の音の高さを決める。

基本的にはシテの声の高さに合わせることを求められますが、一方で地謡参加者の平均的な音の高さも考慮しなくてはなりませんので、シテの高さに合わせられない場合もあり、これが悩ましいところです。

つまり、男性よりもキイの高い女性が人数として多い場合は、全体にやや高めの高さにならざるを得ません。筆者は日頃、声調を黄鐘（バリトン）と盤渉（テノール）の二つに使い分けていますが、最近の素謡での地頭のときは、盤渉で謡うことが多くなっています。

もうひとつのポイントは、地謡参加者が地頭の音を掴みやすくするために、これと決めた音（発声）を一秒の何分の一か早く出すことです。地頭に迷いがあると発声が遅れたり、最初に出した音を二字目あたりから修正したりしますと混乱の原因となります。

#### ② 地謡の速さ、テンポを決める。

地謡には、能の筋書きの運びや内容によって緩急がなければなりませんし、拍子の変化もはっきり区別して謡わなくてはなりません。これをきっちりコントロールするのが地頭の責務です。

謡には、一声、次第、ロンギ、クリ、サシ、クセなどの節があつて、それぞれ固有のリズムがあり、調子がありますが、これを地謡参加者に伝えなくてはなりません。

また、全般的な心得としては、運びの良い謡を心がけることです。過度に節扱いに気を取られてしまいますと、謡が伸びてしまいますから要注意。

能の地謡は素謡よりもゆっくり謡うことが多いので、これを素謡のときに真似て、緩め過ぎると締まりのない謡になってしまいます。一方、修羅乗りなどで、運び過ぎてしまう結果、謡がコケルことがあります。これは修羅乗りの重いリズム感を地頭が表現していないからです。

素人だけでの地謡が一本調子になったり、もたもたしていることが多いですが、これは、地頭の力量不足が原因であると言わざるを得ません。

### ③ 地謡の情感を参加者に伝える。

前記のリズム感と併せて大切なのは謡いの情感の表現です。勇壮な情景、悲哀に満ちた心境、のどかな風景、それぞれに固有の情感があります。これらの情感は通常緩急と声調と声の強弱（音量）をコントロールすることで表現しますが、中でも地頭にとっては声の強弱に意を用いることが肝要です。この場合、地頭一人で声を張り上げたり、絞ったりしてもなかなか全員にそれが伝わりにくい場合がありますが、そのような場合は副地頭がそれにすぐ同調して、地頭の意向を全体に伝える努力をします。

もうひとつ、情感に関係することと言えば、地頭の息継ぎのテクニックがあります。よく素人の謡会で、全員の地謡が途中で途切れてしまうことがあります（但し、敢えて途切れさせる場合もあります。）これは地頭が他の人と同じ場所で息継ぎをしてしまうからです。特に、上歌の初句の「ユルメ」のところ、右脇の「心」（真中に位置している「心」は止めなくてはなりません）、「切り切らず」の箇所、三つユリや二重ウキ回しなどでは、地頭が頑張っても息継ぎをしないで、謡をつないでいくことが望まれます。

### ④ シテほかのお役のサポートをする。

具体的に言えば、お役の人が謡いを間違えたり、省略箇所などがあって、謡い出しの場所が分からなかったりした場合は、地頭が声をかけて手助けをします。

### ⑤ 地謡が舞台上上がるタイミングを決め、地謡参加を促す。

お役と同時に地謡が舞台上上がる場合もありますが、この場合もその旨地頭から参加者に伝えなくてはなりません。また、お役よりも遅れて地謡が舞台上上がる場合は、地頭がそのタイミング（シテの謡っている際に舞台上上がらないように配慮すべし）を決めて、出来れば予め地謡の方たちに伝えておくべきです。

### ⑥ 地謡参加者の座位置を調整する。

舞台上上がる前に、地頭が舞台での着座順や、地謡の列の数を決めて指示します。（初心者は原則として地謡の前の方に坐を占めるようにします）

また、舞台上がって地謡の人たちが着座したときも、見所から見て右とか左に偏っていたり、横の列が極端に長短ばらつきがあった場合には地頭が指示して、一部の人に移動してもらい、形を整える必要があります。

### ⑦ 扇扱いの基準となる。

せめて、地頭とともに並んでいる最後列の人だけでも地頭に合わせて扇の上げ下げをしたいものです。（能では、「カドミセ」と言われている前列左端の人が扇の所作を開始します）

なお、通常は、3句（概ね2行）前に袴から両手を出して膝に置き、2句（概ね1行半）前に両手で扇を取って膝に置き、1句（概ね半行）半行前に扇の先端を舞台に付けて構えます。

以上の役割を踏まえて、地頭の資質（条件）を敢えて列挙すれば次の通りです。

- ① 声量があること、若しくは透る声の持主であること。特に地謡参加者が大勢になるようなときは、地頭は苦勞します。地頭になる人は、皆の耳に聞こえるような謡ができるなら、少しぐらいシテ謡が下手でも務まります。プロの能楽師は修行に当たって最初から発声の訓練に明け暮れますから、謡の下手なプロは大勢いますが、声量に乏しいプロはまずおりません。
- ② 音感が優れていること。
- ③ 息継ぎの間隔が長いこと、若しくは息継ぎ巧者であること。
- ④ 気働きが出来ること

## 2 副地頭

副地頭は地頭のサポート役で、地頭に常に神経を集中し、地頭が謡いやすいように補佐します。ですから、地頭が謡い出したら間髪を入れず地頭の音に同調する発声をしなくてはなりません。

地頭より先に謡い出してはならず、地頭よりも長く謡ってはならず、原則として、地頭よりも大きな声を出してもいけません。

また、万一、地頭が間違い（詞章の読み違い、音程の取り違い、節の誤り、先走り過ぎて謡い出すなど）を犯した場合は、これを出来るだけ目立たないように是正する役割を担います。

地頭が力量を発揮できるかどうかは、副地頭に負うところが多いと思われるくらい、とても重要な役割であり、特に音感に優れ、反射神経が鋭いことが求められます。

地頭と副地頭の息が上手く合うと、相互に、言葉には出さなくても心の中で、相互にやり取りがひっきりなしに行われて、同時の息継ぎを避けたり、「ハネバリ」などの扱いとか、「切り切らず」、「生字落とし」などがスムーズに出来るものです。

座る位置ですが、副地頭が一人のときは地頭の右隣り、また、白謡会でときどき試みているような副地頭を二人指名する場合は、第一副地頭は、地頭の左隣り、第二副地頭は地頭の右隣りに座を占めます。

## 3 地謡参加者

上述した地頭、副地頭の役割を十分承知した上で、謡うことが肝要です。

地頭よりも、自分の方が技量で勝ると思っても、常に地頭の声聞きながら謡うべきであって、自分勝手に謡うことは著しく礼儀を欠くことになります。

全員で協力しながら謡うことで、地謡としてのハーモニーが生まれ、地謡の醍醐味が醸し出されるものです。

以 上

平成24年 2月21日

平 戸 仁 英